

「最高道徳」が生まれた歴史的背景と今後の課題

欠端 實

異なった文化が遭遇したときに、双方に文化間の共通性を理解しようとする動きが出てくる。しかし、今日の状況は歴史的にみて今までになかったものである。

ソ連の崩壊、中国の開放経済体制への移行によって、資本主義的経済体制が地球全体を包み込むようになり、経済的同一性が深く浸透しつつある。そのため、先進国の間では、人々の生活スタイルに共通性が出てきている。このような状況を迎えた現在、はじめてコモン・モラリティを語ることができるようになったのではなからうか。たとえば資本主義国と社会主義国、先進情報社会と封建的部族社会、先進工業国と発展途上国の間では、共通のモラルを語ることが困難なのではあるまいか。政治体制や経済制度など、ある程度共通した社会的基盤が共有されることなしには、共通のモラルを語ることの意義は限定されてくる。その意味では、グローバル化が進行してきた今日、ようやく世界的に共通のモラルを話し合う条件が整ってきたように思われるし、そのことの意味も

大きいと思う。

私は「最高道徳」が生み出された歴史的、思想的背景を問題にした。そのことによって、最高道徳が内包している問題を明らかにしたいと考えた。つまり、なぜ廣池は、普遍性ある道徳をめざしたのか、そしてその普遍性は何によって保証されているのか等々である。

廣池は江戸時代の末年に生まれ、維新後に青年期をおくった。ほぼ同年代の人に、夏目漱石、北村透谷、徳富蘆花、田岡嶺雲、島崎藤村などがある。封建的幕藩体制が崩壊し、開国を迫られ、一挙に西欧文明との対峙を迎えた時代に、幼少期・青年期を過ごした人々の一人である。

維新後、西欧の思想が、軍事、政治、教育、文化、教育のあらゆる面で、怒涛のように押し寄せてきた。廣池は自国を「後進国」であるにとらえた。国家として生き残るためには近代化は必須の条件であり、その目的遂行のために努力することを自己の使命とした。廣池は教育者、学者として、意見を述べ、業績を発表していくのであるが、いつも「世界に通用するものでなければならぬ」という意識があった。普遍的なものでなければならぬとする意識は学問業績―文法学、法制史研究などにおいてヨーロッパのそれと「相通の理」ありとする―の上でも顕著である。

と同時に、近代化し、欧化しながらも、「日本」として存続していくためにはどうすべきか、という問題があった。近代化と伝統の問題である。日本文化のアイデンティティの問題である。広池は自ら「神官」の家系を継ぐ人間としての自覚に立ち、当時の欧化主義に危機感を抱いた国学者、井上頼国に接近していく。(今回の発表はこの辺の事情を実証的に究明した)。結局、廣池は井上と

彼を取り巻く人々との交流を深め、その中で、自らの思想的アイデンティティを確立したといえるように思う。

伝統と近代化、この両者のジレンマを止揚するために、日本の神話の新しい解釈を提出した。すなわち、天祖アマテラスが宇宙本源の神アメノミナカヌシノミコトの意を体してとつた行為は、「慈悲寛大自己反省」という精神をもつてなされたものであるという解釈である。この精神は世界に普遍的に通用するものであり、かつまた日本文化のアイデンティティを維持していくための精神ともなりうるものとした。この精神の服膺によって、世界の国々も諸民族も平和的に共存しあえるとした。

この「慈悲寛大自己反省」なる精神を中核として組み立てられた道徳が「最高道徳」である。もちろん「最高道徳」の内実は抽象的なものではなく、廣池の具体的な体験、実践活動の成果がぬりこめられたものである。

このように「最高道徳」は「後進国」の近代化の過程で生まれたものである。そのためか普遍性への志向が強くにじみ出ている。気がかりなのは全ての道徳が、廣池の提出した「最高道徳」に進まなければならぬ、そこへ収斂していかなければならないと主張しているように受け取られかねないことである。それは明治時代に流入したヨーロッパの「進化論」の影響でもあろう。普遍性を追求するのは良いとしても、お互いに共通のものとして認め合うまでは、異なったものの共存が長く続くことを承認しあうことが重要であらう。異質なものの、多様なものの存在をみとめつつ、普遍

的なものを模索していくべきであろう。性急に普遍性を押し付けるやり方はつしまなければなるまい。多様なものの共存を認めるといふルールの確立が必要である。

さらにはまた廣池によって提出された「最高道徳」は、厳密な意味では、日本文化以外との相互交流の試練を経っていない。廣池自身も、日本以外の文化との生きた接触をもった経験はほんの僅かしか持ち合わせていなかった。これからが「最高道徳」の普遍的意義が確認されるための試練の時期ではあるまいか。その機会がようやく訪れてきたように思う。

欧化（普遍性を追求）しながら日本文化のアイデンティティを保たねばならないとした維新期の人々の課題は、解決済みの問題ではなく、グローバル化の進む今日、依然として私たちの問題である。